
● naver ニュース 2013 年 6 月 14 日
● 中央日報 WEB 2013 年 6 月 14 日
newsis(ニューシス)配信

『ハンゲルの誕生』の野間秀樹、韓国の知へと——なぜ？

【ソウル=newsis(ニューシス)】イ・ジェフン記者

「感性的なものに対しては誰でも反応することができる。何であろうと、よくわからずとも“かわいい”“愛らしい”などと表現することができる。ところが知性はそうではない。言語化しなければならぬし、主体的で能動的な営みが必要だ。知性なしに感情だけが前に出始めると、“お前と私は違う”という思いに終わってしまう。その後にはしばしば悲惨な暴力が待っている。」

ハンゲルの偉大さと繊細さを論じた『ハンゲルの誕生——文字という奇跡』を通じて、韓・日の知識社会に話題を投げかけた野間秀樹・国際教養大学客員教授が韓国について新たなプロジェクトを稼働中である。

韓日関係が悪化しているこの時期だが、韓国の知を日本と共に行おうという作業である。日本の知識人 80 名と韓国の知識人 40 名が関わる『韓国・朝鮮の〈知〉を読む』がそれだ。

計 120 名に韓国の“知”に関わる本を1-5冊ずつ推薦してもらい、これについて 2000 字ほどの紹介文を依頼した。去る 7 月に始められたこの作業は、95%までは進んでいる。

8 月日本の出版社・クオンを通じて刊行予定のこの本の仕上げの作業と、共にしている執筆者たちに会うため野間教授が韓国を訪れた。

昨年、ハンゲル学会主催の周時経(チュ・シギョン=近代の国語学者 1876-1914: 訳注)賞を受賞した野間教授は、『ハンゲルの誕生——文字という奇跡』でハンゲルを“知”の革命であると位置づけた。『韓国・朝鮮の〈知〉を読む』はこうした前提が基礎となっているからこそ可能となった。

『ハンゲルの誕生』を通して、ハンゲルを知として論ずることがある程度は受け入れられた状況で、次の段階へと進む作業だ。ハンゲルが“知”であってみれば、それを基礎にした韓国に関わる本を読む知識人、読書人たちが考える知がどういふものか知りたいのだ。」

“知”へ接近することと、“感性”で接近することは異なる。知は必ず言語を通じて接しなければ

ならない。ことばを換えていうなら、学ばねばならないということだ。言語を意識化せねば、知的な接近は難しい。知というものは書物によって学ばなければならないだろう。本の力というものは、本当に大変なものだ。だからこそ執筆者に本のことを書いてもらった。

評論家・柄谷行人、日本にドストエフスキーブームを起こした亀山郁夫・東京外国語大学前学長、名古屋外国語大学学長、『二十億光年の孤独』で有名な詩人・谷川俊太郎など、日本の文化人から、権在一(クオン・ジェイル)・前国立国語院院長、キム・ソンゴン・韓国文学翻訳院院長、金彦鎬(キム・オノ)坡州(パジュ)出版都市理事長、小説家・金衍洙(キム・ヨンス)、成碩濟(ソン・ソクチェ)、建築家・承孝相(スン・ヒョサン)、映画監督・李明世(イ・ミョンセ)など、韓国の文化人たちまで、多様な分野の人士が執筆者として加わっている。

「一言で言って、“知”という命題に真摯に対してくれる方々をお願いした。知と距離を置き、シニカルに対する方々より、真摯に考えてくださる方々を求めた」という。

今まで受け取った原稿を見れば、詩人・金芝河氏の本などが目立つものの、何かこれといった圧倒的多数の推薦を受けた本はない。野間教授はだがこうした点が気に入っている。

「どうしても知とは広いものだ。何人かの人々が、世界だったり、全体ではありえない。多様な見方が必要だ。取り立てて韓国人だ、日本人だといわずとも、韓国人の一人一人、日本人の一人一人が皆違う。個々人が生きてきた環境と歴史が異なるからだ。この本もまた、ごく一部の人々の考えを盛り込んだものではあるが、本が進み行こうとする方向が認識されれば、さらに多くのことを語る道が拓かれると、希望を持っている。」

単にみんな仲良くとか争わずになどと言っているわけではない。「どんなことでも、地層の深いところにある“知”をしっかりと知って始めよう」と言うのだ。「皆が異なる存在なのに、括ったり、グループ分けをしまえば、境界線が作られる。人々の間に38度線が生ずるのだ。例えば、韓国の知識人、日本の知識人という表現よりは、韓国語圏の知識人、日本語圏の知識人といったことばが、より豊かなものを包摂できる。日本の知識人には在日同胞が存在する。“圏”といったことばなら、そうした人々も共にできる。“知”はこうした配慮や考えを可能にする、理性の力を育んでくれる。」

野間教授は1970年代の日本で、金珉基(キム・ミンギ)、楊姫銀(ヤン・ヒウン)の歌を海賊版で聞き、大好きなのだと言った。1996-1997年にはソウル大学で韓国文化研究所特別研究員のころ、大学生たちがデモをし、催涙弾を浴びる姿を幾度も目撃した。韓国の近現代史の痛みを誰よりもよくわかっているだろうと尋ねると、「他の日本の人たちより、少し近くにいただけだ」と答えた。

野間教授は単語1つ1つを吟味し、慎重だった。韓国の“知”を、知り、知らせる彼の仕事は、韓国と韓国人を、解釈し理解する過程というより、存在全体を受け入れる心配りだった。

■野間秀樹

1970年代現代美術家として8回の個展を開くなど、特異な経歴の言語学者だ。リュブリアナ国際版画ビエンナーレ、ブラッドフォード国際版画ビエンナーレなど、国際展に出品もしている。1979年には、韓国と日本の若い現代美術家7名が参加した「7人の作家——韓国と日本」というグループ展をソウルと東京で主導した。『韓国・朝鮮の〈知〉を読む』にも参加している西洋画家・李相男(イ・サンナム)とはこの時からの縁が続いている。

独学で学んだ韓国語に魅せられ、1983年に30歳で東京外国語大学朝鮮語学科に入学した。以後、韓国語学者として認められ、2005年には大韓民国文化褒章を受けた。『ハンゲルの誕生』は毎日新聞社とアジア調査会が主管する第22回アジア太平洋賞の大賞を受賞している。

韓国と日本の研究者60名以上が共同で執筆している『韓国語教育論講座』(くろしお出版:訳注)や、韓国語学習書『韓国語学習講座 凜 RIN』(大修館書店:訳注)シリーズの編者でもある。

「韓国の知」を探求、野間秀樹教授インタビュー

「韓国の知」に韓日の知識人 120 人が結集、8 月に出版へ

本紙のインタビューに応じた野間教授は「韓日の知識人 120 人の力を合わせたのだから、何らかの扉が開かれるのではないか」と語った。／写真＝李鎮漢（イ・ジンハン）記者

韓国のハングル学会は昨年、言語学者・周時経（チュ・シギョン）にちなむ周時経学術賞の受賞者に日本の野間秀樹・国際教養大学客員教授を選んだ。周時経学術賞を外国人が受賞したのは初で、それも独島（日本名・竹島）をめぐり、韓日関係が冷え込んでいた時期だった。日本で先行出版された野間教授の著書『ハングルの誕生ー音から文字を創る』（2010 年）は 3 万部が売れ、日本の知識人社会で話題となった。翌年には韓国語版も出版され、朝鮮日報と東亜日報が 2011 年の「今年の本」に選定した。

類いまれなほど情熱的な野間教授は、次のプロジェクトとして、韓日の知識人 120 人が共にする『韓国・朝鮮の〈知〉を読む』を 8 月に日本の出版社クオン（東京都中央区）から出版する。同書は日本在住の知識人 80 人が「どんな本で韓国の『知』について知ったのか」を紹介する一方、韓国の知識人 40 人が「韓国の『知』を知ってもらうための本」を推薦する内容だ。

野間教授は日本語のイントネーションがほとんど感じられない流ちょうな韓国語で本紙のインタビューに応じた。以下は一問一答。

—今回の企画のきっかけと意義は。

「厳しい言葉かもしれないが、日本では『韓国』という単語と『知』という単語が結び付いて議論されたことはほとんどない。もちろん韓国の芸術、映画、ドラマ、歌、俳優、歌手など大衆文化は日本でも高い評価を受けている。しかし、芸術として感動はしても、『知』として共有する対象ではなかった。『ハングルの誕生』は、ハングルという文字を『知』という側面から書いた本だった。今回の本はその次の段階として、『知』によって韓国を語る第一歩だ」

—120 人を選んだ基準は。

「(笑いながら)友人がリストを見て『どんな基準で選んだか分かった。クオリティ一だね』と言っていた。これまで原稿を寄せてくださった方は、日本側 80 人、韓国側 40 人だ。在日韓国・朝鮮人も 15 人含まれている。質を重視したので、名前からイデオロギーがまず思い浮かぶ方々はおのずと除かれた」

リストには、思想家で文芸評論家の柄谷行人氏、翻訳書『カラマーゾフの兄弟』が 100 万部以上売れ、日本の大衆にも知られる亀山郁夫・前東京外大学長、和田春樹東大名誉教授、小説『火山島』で知られる在日朝鮮人作家の金石範(キム・ソクポム)氏、『ゆれる』などの作品で知られる映画監督の西川美和氏などが含まれている。韓国からは文学評論家の金炳翼(キム・ビョンイク)氏、白樂晴(ペク・ナクチョン)氏、詩人の申庚林(シン・ギョンリム)氏、小説家の成碩濟(ソン・ソクチュエ)氏、金衍洙(キム・ヨンス)氏、建築家の承孝相(スン・ヒョサン)氏、映画監督の李明世(イ・ミョンセ)氏、画家の李相男(イ・サンナム)氏らが名を連ねている。

—依頼書にはどのように書いたのか。

「韓国の『知』に関する本を 1-5 冊推薦してほしい。そして、それに関する自身の考えを 2000 字程度書いてほしいというものだった」

—皆が快諾してくれたか。

「最初は回答率が 20% だった。『興味深く、面白いことは分かるが、私は韓国の知についてよく知らない』という答えが多かった。それで、『どこかで韓国の知とすれ違ったり、ぶつかったりした瞬間があったと思う。そうした瞬間瞬間を書いてほしい』とあらためて依頼した」

—推薦が最も多かった本は。

「現在集計中だが、圧倒的に推薦が多かった本はないようだ。想像以上に多様だ。例えば柄谷先生は李御寧(イ・オリョン)先生の『「縮み」志向の日本人』、亀山先生と和田先生は(詩人で思想家の)金芝河(キム・ジハ)先生の本を推薦した。柄谷先生は以前は『「縮み」志向の日本人』を批判していたが、今こそ読み返すべき時だと指摘した。恐らく最近の韓日関係に対する省察だろう。亀山先生は金芝河先生について『(反政府運動で)2度も死刑判決を受けた彼を思うと、体が凍り付く思いだ。それほどまでに強い人間が韓国にはいるのか』と書いた。同時代の日本にはそんな知識人はいなかった。

外交辞令ではなく、率直に書いてくれたことに感動した」

一意味はあるが、韓国の知を知る窓としては、偏狭な印象も受ける。全てが 70—80 年代の本でもあるし。

「そうではない。両国の学者はリアルタイムで互いの研究成果による交流を行っている。また最近の翻訳書は文学書籍が絶対多数だ。亀山先生が一番に推薦した本は小説家・漢江（ハン・ガン）の『菜食主義者』だった。申京淑（シン・ギョンスク）、キム・エランなどの本もリアルタイムに翻訳されている」

一あなたは日本人だが、ハングルや韓国に対して熱情的だ。もしある日本の民族主義者に「どうしてそうなのか」と尋ねられたらばどう答えるか。

「韓国にも命懸けでロシア文学やフランス文学に取り組む方々がいるのではないか。そういう質問をする民族主義は危うい。一番率直な答えは、面白いからだ。誤解を呼ぶかもしれないが、今までの両国の交流は、文化に基づく感性的な接近だった。そうした接近は誰でもできる。『知』を通じた接近はどうしても限定的だ。私一人ではどうにもならないが、120 人が集まればある程度可能ではないか」

野間教授は、周時経学術賞を受賞する前の 2010 年に『ハングルの誕生』で毎日新聞社の「アジア・太平洋賞」大賞を受賞した。一国の立場を一方的に代弁する学術書ならば不可能だったことだ。偏狭なナショナリズムの窓ではなく、普遍的な知と学ぶことの喜び。野間教授の新著に期待を感じるのはそういう理由からだ。

■野間秀樹

元々は美術を学んでいた。福岡県生まれで、東京教育大芸術学科で構成を専攻し、1979 年に初めて韓国を訪れた。当時は理論と創作が融合した芸術家・李禹煥（イ・ウファン）氏に深く影響されたという。野間教授は「日本人の多くが韓国を見下していたころだったが、現代芸術を志す日本人はそうではなかった。李禹煥先生がいたからだ」と語る。その後は 1983 年に東京外国語大学朝鮮語学科に入学し、人生の進路を変え、辞書を数万回めくる熱心な韓国語学者になった。

魚秀雄（オ・スウン）記者
朝鮮日報／朝鮮日報日本語版

韓日の知識人 120 名、韓国の知的世界を探る

韓国と日本の知識人 120 名余りが韓国人が書いた本や韓国の知について書かれた本を中心に、朝鮮半島の 知的世界 を読み解くというプロジェクトが進行中だ。この夏、日本で先ず出版され、続いて韓国でも翻訳出版される、500 ページの本『韓国・朝鮮の知を読む』がそれ。

日本では思想家・柄谷行人をはじめ、亀山郁夫・前東京外国語大学学長、哲学者・西谷修、比較文学者・四方田犬彦、小説家・金石範（キム・ソクボム）、玄月、星野智幸、韓国文学研究者・大村益夫、映画監督・西川美和、和田春樹・東京大学名誉教授、イタリア文学者・和田忠彦など、80 余名が参加している。

これらのうち 10 名余りは在日朝鮮人である。韓国からは、評論家・金炳翼（キム・ビョンイク）、白樂晴（ペク・ナクチョン）、崔元植（チェ・ウォンシク）、ハンギル社代表・金彦鎬（キム・オノ）、詩人・申庚林（シン・ギョンニム）、小説家・成碩濟（ソン・ソクチェ）、建築家・承孝相（スン・ヒョサン）、劇作家・李康白（イ・ガンベク）、画家・李相男（イ・サンナム）、古典文学者・李鍾黙（イ・ジョンムク）など 40 名余りが執筆者として参加している。

日本における韓国の大衆文化は「韓流ブーム」などを通じて既に広く知られているが、韓国の知識世界についての関心は依然として微々たるものである。こうした現実を変えてゆくことに、2つの言語圏のこのように多くの知識人たちが共にかかわるのも、前例のないことであるばかりでなく、1冊の書物の共同執筆者として共にするのも、これまでなかったことである。とりわけ日本の右傾化の流れの中で、韓日間の外交の梗塞が他の分野まで波及している状況において、意義深い営みだと言えよう。

このプロジェクトの企画者は、ベストセラー『ハングルの誕生 -- 文字 という奇跡』（トルベゲ、2011）を書いた韓国語研究者、野間秀樹・国際教養大学客員教授（前東京外国語大学大学院教授）、最近ソウルで会った野間秀樹教授は、「韓日間は文化も政治も互いによく知っているけれども、その真ん中の部分である 知 については余りにも知らない。隣人どうしがこうした状態でずっといて良いわけがない」と言う。

彼は、今回の仕事における核心は、知 と、（境界を超えて）共にすること だと説明する。「韓日間は現在多くの人々が行き交っているけれども、感性的な出会いは出発点に過ぎない。あらゆるものが理性の光で照らされねばならない。政治も同様だ。それ

らを貫く基盤となるもの、それが理性の光、即ち知だ。知がないところには感情的な対立がもたらされやすく、つまるところは戦争や暴力という悲惨へとも連なりうる。もう二度とそうしたありかたは避けねばならない。」

感性は文字なしでも可能だが、知的な作業は 話されたことば や 書かれたことば や本を土台に成り立っている。若き時代からの彼の考えが具体化したのは、東京で韓国の本を日本語に翻訳出版する出版社・クオン(CUON)の代表・金承福(キム・スンボク)氏と出会い、意気投合してからだ。

これまで出版社に原稿を送ってきた 120 名は、それぞれ 1 冊から 5 冊の本を選び、それと関わる思いを 200 字詰め原稿用紙で 10 枚ほどにまとめた。野間秀樹教授は、文学、思想、芸術、歴史、建築、そしてチャジャン麺に至るまで、「予想はしていたが、それよりもさらに多様な主題が扱われている」と言う。

例えば、柄谷行人は李御寧(イ・オリョン)の『縮み志向の日本人』について書いた。「刊行当時はその本について批判的であったのに、今回は今こそこの本を読み直さねばならないと再評価なさっている」と野間秀樹教授は述べている。和田春樹教授は李泳禧(リ・ヨンヒ)教授の多くの著作から編んだ日本語版の『分断民族の苦悩』と、金芝河(キム・ジハ)『飯・活人』、そして自身の『これだけは知っておきたい日本と朝鮮の二〇〇年史』について書いている。亀山郁夫学長は、李恢成(イ・フェソン)の『砧を打つ女』、韓江(ハン・ガン)の『菜食主義者』、金芝河の『不帰』を扱った。2 名以上の推薦を受けた作家や本は、朴景利(パク・キョンニ)の『土地』、兪弘濬(ユ・ホンジュン)の『我が文化遺産踏査記』、申庚林詩集、申京淑(シン・ギョンスク)の『母を願ひ』、『増補底本 李箱(イ・サン) 文学全集』、李泳禧(リ・ヨンヒ)の『転換時代の論理』などだ。姜希顔(カン・ヒアン)の『養花小録』(李鍾黙訳解)、朴趾源(パク・チウォン)の『熱河日記』(キム・ヒョルチョ訳)も対象図書に上がっているが、これで『韓国・朝鮮の知を読む』という書名の朝鮮が、南北のみならず、朝鮮王朝までをも対象の範疇としていることがわかる。

ハン・スンドン記者